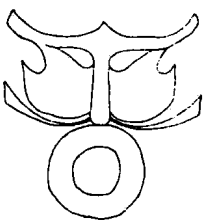
中国の自伝文学

川合康三

中国の自伝文学



創文社刊

〔かわい・こうぞう〕1948年，静岡県浜松市に生まれる．京都大学大学院博士課程修了．京都大学助手，東北大学文学部講師，同助教授，京都大学文学部助教授を経て，現在同文学部教授．
〔著書〕『曹操』(1986年，集英社)，『文選』(共著，1988年，角川書店)，『隋書経籍志詳攷』(共著，1995年，汲古書院)．

中国学芸叢書
(3)

〔中国の自伝文学〕

一九九六年一月一五日 第一刷印刷
一九九六年一月二〇日 第一刷発行

定価 二五七五円
(本体二五〇〇円)

著者 川合康三
発行者 久保井浩俊
発行所 株式会社 創文社
〒102 東京都千代田区麹町二―六―七
電話 〇三―三二六三―七一〇一(代表)

ISBN4-423-19421-X
Printed in Japan

精興社印刷
鈴木製本所

目次

I　中国における「自伝」　三

II　衆多と異なる我れ――書物の序に見える自伝　一八

III　かくありたい我れ――「五柳先生伝」型自伝　六七

IV　死者の目で見た我れ――自撰墓誌銘　一五七

V　詩の中の自伝　二〇六

VI　自分とは何か――「自伝」の登場　二三七

VII　その後の自伝　二六八

注　二七一

あとがき　二七九
索引　1～12

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中国の自伝文学

I　中国における「自伝」

一　西欧の自伝の移入——胡適・郭沫若の自伝

ガンジーが『自叙伝』を執筆していた時、友人の一人がそれをやめさせようとして、こう忠告したという。「君はどうしてこの冒険を始める気になったのか。自叙伝を書くということは、西洋特有の習わしである。東洋では、西洋の感化を受けた人たちを除くと、だれひとり自叙伝を書いた者がいないということはよく知られている」[1]。これは前後の記述から一九二五、六年頃のことと思われるが、ガンジーの友人のいうとおり、「東洋」の一部である中国でも、自叙伝が書き始められるようになるのは、二十世紀に入って「西洋の感化を受けた人たち」が提唱してからのことであった。一九三一年、胡適（一八九一—一九六二）四十歳の時に書かれた『四十自述』[2]は、西欧の自伝に匹敵する中国の自伝として最も早い時期に属するものだが、その「自序」で胡適は「私はここ十数年、中国には伝記文学が最も欠けているのを深く感じて、至る所で先輩や友人に自伝を書くように勧め

てきた」と述べ、アメリカに留学した彼が西欧に自伝文学が定着しているのを見て、中国にもそれを広めようとした事情が語られている。「自序」の末尾では「私のこの『自述』はまだ書き終えていないが、何人かの旧友の自伝、例えば郭沫若氏のもの、李季氏のものなどは、既にもう出版されている」[3]という。郭沫若（一八九二―一九七八）の、のちに『沫若自伝』四巻としてまとめられる自伝四部作の最初の巻となる『少年時代』、その第一部である『我的童年（私の幼年時代）』は一九二八年に書かれ（初版は一九二九年）、第二部の『反正前後』は一九二九年に書かれているので、胡適の自伝よりやや早い。その『我的童年』の「前言」[4]に郭沫若はこう記している。

私はアウグスティヌスやルソーに倣って懺悔のようなものを書こうとは思わない。またゲーテやトルストイに倣って天才などを描きだそうとは思わない。私が書くのはただ、このような社会にこのような一人の人間が生まれたことである。或いはこのような人がこのような時代に生まれたこととも言えるかもしれない。

この記述から、郭沫若も自伝執筆に際してアウグスティヌス、ルソー、ゲーテ、トルストイといった人々の、西欧の代表的自伝を意識していたことが分かる。それらを想起しているのは、自伝というものをまずそういうものだと捉えていたことを物語る。と同時に、自分の書く自伝は西欧の自伝が告白ないし天才の記録であるのと違うということも表明している。彼の意図する自伝は、懺悔・告白といった自分の恥部を表白する、内省を伴った記録でもないし、また天才の特異な伝記で

もなく、普通の人間の平凡な人生の記録に過ぎないと断っている。これは中国の自伝が西欧の自伝から刺激を受けて生まれたにも関わらず、西欧の自伝とは異質の、中国独特の性格に変貌していることをよく示している。懺悔・告白から出発した西欧の自伝は、自己の非を自ら語る、つまりかつての自分とは違う自分が昔の自分を顧みる、そういうかたちの自己省察が本質を成すものであり、そこから「精神的自己形成史」としての「西欧近代の自伝」に発展してきたのだったが、[5] 中国の自伝には懺悔・告白のように己れの非を述べるという性格が概して乏しい。郭沫若は『少年時代』の「序」でこうも述べている。「私は何も懺悔することはない。少年の時の生活は、自分で責任を負うことができないものだ」。

郭沫若は西欧の自伝として懺悔・告白型のほかに天才の記録を挙げていたが、天才は卓越した才能によって衆多の人々と差異、隔絶を生じ、そこに他と異なる自己の輪郭が鮮やかに浮かび上がるものであろう。中国の自伝も後に見るように衆多との差異に気付くことが自伝の動機となっているが、しかしその際に天才という概念は強くないように見える。曹丕（そうひ）の自伝的記述（第II章第三節）は自己の卓越をもって衆多と異なる自分を際立たせた自伝の典型であるが、その場合でもまったく異質な人間を描いているわけではない。中国ではすぐれた能力も程度の差であって、衆人と連続しているかのように思われる。

郭沫若はそのように西欧の自伝の二つの型に合致しないことを述べているだけでなく、西欧には

希薄な、中国の自伝に際立つ性格についても期せずして記している。「このような社会がこのような人間を生んだ」、或いは「このような人間がこのような社会に生まれた」、すなわち個人の背景としての社会、或いは社会の中の個人——社会・時代と密着したかたちで個人を捉えようとするのは、自己省察の乏しいことと表裏を成す中国的自伝の特徴に数えられよう。胡適の『四十自述』が自分は歴史家としての訓練の方が強かったので、どうしても史伝の体裁になってしまったと語っている（「自序」）ことも、個人と不可分な関係で時代を記録し、個人の記録のみならず、或いは個人の記録である以上に時代の記録であろうとする中国の自伝のスタイルを語っている。二十世紀に至って西欧の影響によって書かれ始めた中国の自伝も、このような中国的性格に染められているのである。

胡適の鼓吹によって自伝執筆は盛んになったようだが、それ以前にはガンジーへの忠告者がいうとおり、西欧に見られるような自伝が中国に存在しなかったことは確かだ。しかし西欧の自伝と同質でないにしても、中国なりの「自伝的文学」が過去の中国にあったこともまた事実である。我々がふつう思い描く自伝、すなわちアウグスティヌスに始まり、ルソーやフランクリンなどに代表される西欧型の自伝、それと中国の過去の自伝的文学とのずれは、中国の自伝の性質を際立たせてくれるであろう。それはまた、自伝文学のみならず、中国古典文学全体の特質、或いはさらに中国における自己認識のありかたについても示唆を与えることになろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二　自伝の嚆矢——王韜の自伝

胡適および彼の挙げている李季、郭沫若に先だって、清末の変法自彊派の論客、王韜（一八二八—九七）にも自伝がある。王韜は四十歳前後の数年間、イギリス、フランス、ロシアに遊び、さらにのちには日本にも来たことのある、近代中国における最も早い外国体験者の一人である。もし彼の自伝「弢園老民自伝」[6]を中国の自伝の嚆矢とするならば、それも彼が西欧に直接触れる経験をもったことと無縁でないかも知れない。

しかし王韜の自伝は中国の伝統的な人物伝のスタイルから抜け出ていない。一つはまず分量が五千字程度に過ぎず、胡適らが西欧の自伝を意識して書いた自伝が優に一冊の書物を成すのとは異なることだ。分量の違いはもちろん内容の違いも伴い、書かれているのは履歴書をややふくらましたようなもので、事柄の具体的肉付けや、自分という人間の性格、人となりの叙述はほとんどない。とはいえ、単に詳しい履歴書を書こうとしているのではなく、そこには激動の時代に翻弄され、個人の身にも相次ぐ不幸に見舞われた自分の生涯に対する深い嘆きがこめられている。「嗚呼、老民は既に子無し、而して復た其の女を奪わる。解せず　造物者の之に待する所以の抑そも何ぞ刻酷の斯に至るかを」。わが身の不幸への痛切な嗟嘆が、彼に自伝の筆を取らせた動機となっているのだ。

伝統に沿う自伝である特徴の二は、自分を指す呼称にある。王韜は自伝の中で一人称代名詞を用いず、一貫して「老民」と称している。自伝の中で自分のことをどう呼んでいるか、またそのことの持つ意味については、以後に見ていく自伝のそれぞれに注意していくが、一人称代名詞がふつうに使われるようになるのは胡適ら以後のことである。

王韜の自伝はこのように伝統的スタイルに忠実であるかに見えるが、その末尾で「生きながらにして伝を作るは、古に非ざるなり」、本人が生前に伝を著わすのは、過去の伝統にはなかったことだと記している。にもかかわらず自分が敢えて「自伝」を物したのは、「老民　蓋し世を没えて聞こゆる無きを懼れ、特に自ら梗概を敍ぶること此くの如し」、死後に忘れられてしまわないために、生きたあかしとして自分の記録をのこしておきたいというのである。この発想も措辞も『論語』衛霊公篇の「君子は世を没えて名の称せられざることを疾む」という一節に基づいている。それほどに伝統に沿いながらも、「古に非ず」というように、自分が自分の人生を振り返って記すことは古典詩文にはなかったことなのであった。王韜の自伝は旧来の伝記のかたちを踏襲しながらも、近代の自伝に向かって一歩踏み出したものといえよう。(7)

三　「自伝」ということば

西欧において今ふつう「自伝」の意味で用いられているautobiographyという語は意外に新しいようだ。ロバート・フォーケンフリック編『自伝の文化』[8]の冒頭にこのことばの出現が詳細に調べられているが、それによれば一七八六年、'Autobiographical Narrative'という形容詞形が最初にあらわれ、autobiographyないしその同義語self-biographyは一八世紀後半にイギリス、ドイツで別個に用いられ、フランスではやや遅れて一八三〇年代から使われるようになったという。一八〇〇年前後にこの言葉が登場したことは、自伝という概念自体がその時期に固まったことと関わる。中川久定氏によれば、ルソーを嚆矢とするヨーロッパの近代的自伝は、十八世紀末から十九世紀前半に成立したものだというが[9]、それはまさにautobiographyの語の登場と一致しているのである。

ところがautobiographyということばと、語の構成も意味もぴったり一致する「自伝」という中国語は、西欧よりなんと千年も早く、西暦八百年前後、王朝でいえば唐代の半ばを過ぎた、いわゆる中唐の時期に出現しているのである。それ以前には、そしてそれ以後もふつうには、自分で自分のことを記した文は「自敍」ないし「自序」、或いは「自述」などということばが用いられてき

た。「自伝」という中国語が中唐の時期に登場したことは、autobiographyということばの誕生と自伝の概念の定着とが一致していたように、もちろん西欧型の自伝がその時期に生まれたわけではないけれども、第Ⅵ章で見るようにこの時期が中国における自伝的文学の系譜の上で一つのエポックを成すことと呼応している。

四　自伝とは何か

まず始めに何をもって自伝とみなすかという点から考えてみよう。というのは、自伝は文学ジャンルの中でもとりわけ定義付けがむずかしいからだ。極端な例としては「あらゆる文学作品はすべて自伝である」という考え方もある。こう考える人は一人にとどまらないだろうが、たとえばフランスの自然主義の作家、アナトール・フランス（一八四四―一九二四）は「すべての小説は、よく考えてみれば自叙伝だ」と語り、中国近代の私小説作家郁達夫（一八九六―一九四五）がそれを用いて「文学作品は、すべて作家の自叙伝である」と述べているという。[10] 私小説と自伝とは確かに最も親密な関係にあるといえるだろうが、完全なフィクション作家であってもそう発言して差し支えない。時空を超え現実を超えて何を描き出そうが、結局は自分自身を書くことにほかならないのだ、と。その場合の強引な結合の方がこの発言のインパクトを強めることだろう。

すべての文学を自伝であるとみなす考えは、ことに中国の古典文学においては、西欧文学一般よりいっそう見事にあてはまってしまう。というのは、中国では詩でも文でも、士大夫層に属する作者が自分自身の生活の中から、現実の状況、実際の出来事、そこに生じた感情、思念、そうしたものを綴るのが文学であると見なされてきたからである。架空の人物が中心的役割を担い、虚構の出来事が述べられるジャンルとしては、白話小説、戯曲などいわゆる俗文学以外にも、詩における楽府、閨怨詩、散文における伝奇など、中国古典文学にもないではないが、しかしそれらは古典詩文の中心をなすものではない。

事実性と虚構性をめぐる中国と西欧の詩の相違について、アメリカの中国文学研究者が興味深い例を挙げている。スティーブン・オーウェン『中国古典詩と詩学』[11]では杜甫の「旅夜書懐」とワーズワースの「一八〇二年九月三日、ウェストミンスターブリッジにて作る」[12]という、ウェストミンスターブリッジからロンドンの光景を眺めて描写した詩の二つを並べて、こう比較する。杜甫の詩には具体的場所、日付はないが、にもかかわらずそれが杜甫の人生に実際に起こった一駒であることを読者は確信する。それは日記のようなもので、ただ日記より経験の一部だけに絞って強烈に書かれているという違いがあるに過ぎない。一方ワーズワースの詩には一八〇二年九月三日という具体的日付け、ウェストミンスターブリッジという具体的地名が詩題に記されているにもかかわらず、読者はワーズワースがその時、その場所に実際いたかどうか、詩に書かれているようなロンドンの

光景が実際その時に見られたかどうか、そういうことに一切関心を払わない。中国の詩の中の経験は歴史的、現実的なものであると受け止められるのに対して、西欧の詩はそうとは受け取られず、すべてがメタファーであり、フィクションであって、そこから意味が立ち上るのが詩であると見なされる。――このように述べて、オーウェン氏は東西の詩の間に横たわる本質的な相違を指摘している。

西欧文学の虚構性、中国文学の現実性という対比は言いふるされた感もある対比であるが、今なお依然として大きな差異であるには違いない。ただ、両者を単純に対比して捉えるのは不十分であって、西欧文学と比較する場合、注意しなくてはならないことは往々にしてそれが西欧近代文学のみを対象としがちなことで、古典文学をも含めてみれば中国古典文学との共通性は意外に多い。西欧の文学を詩と小説だけに限定してしまい、そのために文学＝虚構と短絡させるのは、近代文学にのみ囚われた見方である。にしても、西欧ではギリシアの昔から悲劇・喜劇のような虚構の文学が文学の中心的なジャンルとして発達してきたことは確かだ。詩という領域に限ってみても、先のアメリカ人学者の驚きがよい例を提供しているように、作者の実人生をそのまま反映しているとは考えないのが、西欧の詩の作り手と読み手双方に共有される態度なのである。

虚構性と現実性という区別も実は必ずしも截然と対比できるものでないだろうが（たとえば中国の文学に描かれる「現実」なるものも、杜甫以前の場合、おおむね文学として書かれることが決まっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com